

書評と紹介

註

櫻井義秀「現代日本の宗教社会学における調査研究の動向——宗教的物語の諸相」(二〇〇五年韓日宗教フォーラム予稿集) http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~n16260/pdf2005/korea_forumshinyoen050705.pdf

上田閑照監修／北野裕通・森哲郎編集

『禅と京都哲学』

(京都哲学撰書別巻) 燈影舎 二〇〇六年八月三〇日刊

A5判 五二四頁 四三〇〇円＋税

竹村 牧男

「編集後記」によると、禅文化研究所哲学研究班(班長・上田閑照、幹事・堀尾孟)の活動が十五年以上続けられ、『禅と哲学』、『禅と現代世界』の成果を産んだのち、この研究班の活動をひきつぐかたちで、一九九五年二月、「京都哲学」の研究を目的とした研究会「京都哲学研究会」が立ち上げられたのだという。本書は、その研究活動の一部の成果を公表したものである。

「京都学派」の語は聞くことがあるが、「京都哲学」の語は、必ずしも知られるものではないであろう。本書には、西田幾多郎・鈴木大拙・久松真一・森本省念・西谷啓治・片岡仁志の六名の哲学者・思想家がとりあげられているが、この限り、京都大学の哲学学派のみでもない。京都哲学研究会では、他に三木清・務台理作・木村素衛・高坂正顕・下村寅太郎・唐木順三・高山岩男などもとりあげてきたというので、「京都哲学」とはほぼ「京都大学の哲学学派(京都学派)の哲学」を意味するものと思われるが、では上記六名の間にそういうひとまとまりの哲学、あるいは共通の特徴を持つ哲学があるのか、厳密に考えていくとなかなかむずかしい問題も出てくることであろう。このことについて、上田閑照は「生死去来 真人人体——道友堀尾孟さんに捧ぐ」という題を持つ「まえがき」において、「京都」という地名がこの場合意味を持つのは、歴史的に宗教的文化の意味が沈殿している京都が六名に共通した「場所」であり、それぞれ「京都」という場所の空気、あるいはいわゆるGenius Loci「土地の精神(霊)」の世界に吹き抜けるそよぎに触れていたからである」と解説している。なお、この「京都哲学」については、北野裕通「『京都哲学』発掘」(『宗教哲学研究』第十四号、北樹出版、一九七七年)に詳しく述べられているという。

多くの京都に居住した哲学者・思想家の中から、ここには選ばれた六名に共通していることは、禅と哲学の双方にかかわっているということである。その禅も、京都の臨済禅が主となるが、たとえば大拙は鎌倉円覚寺に修行し、西田も金沢での雪門

老師への参禅が血肉となっていたであろうから、さすがに「京都の禅・哲学」というタイトルにはなしえなかったか。ともあれ、実際に禅を修行した人が、いかなる思想的表現に出て、いかなる体系的思想を唱ええたのか、あるいは現実の諸問題をどのように分析し解明しえたのかは、なるほど興味深い問題である。単に興味深いというだけでなく、そこには東洋と西洋、体験と言語、無分別と分別、宗教と科学、永遠と現代等々の、今、生きている我々のいのちにとって根源的な諸問題が埋蔵されている。おそらくこうした問題について、京都哲学研究会では、深くつつこんで議論してきたことであろう。その成果が、ここにまとめられて公刊されたということと推察される。

なお、本書の編集方針として、このテーマからして、「執筆者は何らかの仕方では禅に直接触れたことのある参禅経験者にしてかつ広い意味での哲学の研究者であること」が定められたという。したがって、執筆者の各人自身が禅と哲学の稜線を生きていて、自らに自覚される問題を先輩の哲学者・思想家に問い、探り、なんらか解答を見出して、あらためて論じ直している論文が収載されたことであろう。また、編集方針の一つに、「以前に発表された論文に加筆補足してもよい」とされ、全部が書き下ろしではないことは、留意しておいてよいかと思われる。

本書の内容を、まず目次から紹介しよう。それは、次のようである。

まえがき（上田閑照）・総説（上田閑照）

第一部 禅と京都哲学

「禅と西田哲学」（森哲郎）、「西田と科学」（松丸壽雄）、「鈴木大拙における思想」（堀尾孟）、「外は広い、内は深い」（上田閑照）、「覚の哲学」（美濃部仁）、「久松真一における禅と茶と藝術と」（倉澤行洋）、「省念老師のこと」（土井道子）、「森本禅の立場」（山田邦男）、「西谷啓治の〈禅・哲学〉」（ブレット・デービス）、「西谷と科学」（松丸壽雄）、「片岡仁志」（北野裕通）、「無に生きる」（山田邦男）

第二部 禅と世界

「身心時間」（大橋良介）、「西田とフィヒテ」（美濃部仁）、「禅とキェルケゴールの通路」（西村恵信）、「創造・脱創造・一円相」（小林恭）、「禅と技術」（秋富克哉）、「禅とキリスト教」（花岡永子）

基本文献（森哲郎・北野裕通）・編集後記（北野裕通・森哲郎）・「禅と京都哲学」年譜（秋富克哉・米田俊秀）

総頁五二四頁という、そのように大部な書物のすべてを詳しく紹介・批評する余裕が、残念ながら今の私にはないのが実情である。大変申し訳ないが、ここで第一部の各論文についてのみ、その骨子をきわめて粗略ながら紹介しておこう。

森哲郎「禅と西田哲学」は、初め、『善の研究』の純粹経験そのものに純粹経験・思惟・意志・知的直観という重層構造が含まれていること、およびそのことが『善の研究』の章立てに反映していることを指摘し、そこから、経験・自覚・場所へと西田の思索が展開したことを、西田のその後のテキストに沿っ

書評と紹介

て跡づける。さらに『十牛図』の独自の解釈を展開し、西田哲学の進展がそれと重なりあうことを跡づけ、西田の基本概念の理解のための道を提供している。

松丸壽雄「西田と科学」は、まず、純粹経験の分化発展は、直観と反省を結びつける自覚において成立すると見られていたことを明かし、その後、数学研究における個多間の逆対応と宗教哲学における絶対者と個の間の逆対応という二種類の逆対応があることを指摘し、「物になつて考え、物になつて見る」ところに、両者の逆対応が実現して同時に科学の立場も成立することになるのであり、西田にあつては宗教的真理と科学的真理とは場所の論理において結合されると論じる。

堀尾孟「鈴木大拙における思想」は、鈴木大拙の「禅思想」の成立とその意義を追跡する。大拙の言葉「文字も亦道」（『禅の第一義』「緒言」に出る）を手がかりに宗教的覚醒における「不立文字」と「立文字」の関係を分析し、さらに特に『盤珪の不生禅——禅経験の研究序説』を重視して、そこに出る「禅体験」「禅意識」「禅思想」の分析をていねいに解説している。盤珪の「不生」という「立文字」が日常生活に直結しているあり方が、大拙の「立文字」と重なる点を描き出している。

上田閑照「外は広い、内は深い」は、アメリカで生活した大拙にとって、「東洋的」ということがどのような意味を持つていたかを徹底的に究明し、それは「無分別の分別」に集約されていることを明かしていく。さらに曾我量深との対談をとりあげて、大拙における浄土教（実は日本の靈性であろう）の意味を掘り下げている。これらのすべてを、直接、一言で表す言葉

は、「妙」であることも指摘されている。

美濃部仁「覚の哲学」は、久松は、真の哲学は、対象的把握を否定しつくしたところに覚される真実の自己（主体）に立つてはじめて成立すると見ていたこと、もちろん宗教の成立もそこからであること、を論じ、さらにその真実の自己を、講義「法界縁起論」（凝然『華嚴法界義鏡』による）に見える四法界との関係で解説する。それによると、久松においては、根本主体が起動して事が成立するのが理事無礙法界であり、その理が空に徹底されたのが事事無礙法界だという。

倉澤行洋「久松真一における禅と茶と藝術と」は、前半に、久松における茶禅一味の生活と境涯を描いてその人となり进行を明かすと同時に、茶と一味とされる禅とは何かを論じる。後半には、久松における藝術・道・修行を追跡して、修行を通して実現する道には、遊戯の世界が開けること、その修行には、心と形（姿）の相互交渉があるべきことを論じている。

土井道子「省念老師のこと」は、まず森本省念老師に就いて指導を受けた著者が経験した老師の言動をいくつも収録し、ついで著者が頂いた書簡からまたいくつも収録して、老師の人のいし禅を活写するとともに、そこに表われた面前の他者に対して濃やかに応接する老師のいわば「禅行為」を伝えようとしている。もちろん、その背景には、「禅思想」がはたらいっていることを、言外に訴えているであろう。

山田邦男「森本禅の立場」は、森本の禅の立場を、西田の宗教哲学を参照しつつ、両者の共通点として、①事実そのままという事実、②その事実そのままが無限に転（展）じていくとい

う動態、の二つの面から分析していく。もとより森本には、体系的な思想の表現があるわけではないが、その折にふれての言葉をてがかりに、きわめて手際よく論を進めている。ここでは、あえてその一例をあげておこう。「しかし、この問題が真に徹底すれば、そこにさらに一回転が起こるという。」「過日、京大の西谷博士来る。夜おそく迄酒をのみて語る。余曰く、臨済録から歎異鈔教行信証も出ると、博士曰く、歎異鈔から禅がほとばしると。」(森本―三〇八)この端的な言葉は次のように解されうであろう。禅については「死にきれない！」と死にきった処が脱落の当処であり、真宗については「とても地獄は一定すみかぞかし！」と成りきった処が阿弥陀仏に救われている当処である、と。」

ブレット・デービス「西谷啓治の〈禅・哲学〉」は、西谷が、禅と哲学双方の伝統的な形態に批判的な考察を行い、それらが新しい形態になる必要性を問題とし、一方、西田らの哲学をひきつぎつつもニヒリズムの問題と対決したことで、西田等ともニーチェ、ハイデッガー等の西洋の哲学者とも異なる〈禅・哲学〉を切り拓けたとの観点から、西谷の思索を克明に論じている。特にニヒリズムを克服する道としての「退歩」の概念に注目し、西谷は徹底的な退歩返照による内在的突破が世界との開けた関わりを初めて可能とすること、退歩における脱自的超越において空の場に達するとき初めて絶対肯定に転じうることを説いている、と指摘している。

松丸壽雄「西谷と科学」は、西谷の『宗教とは何か』の最初の四論文が執筆された一九四四―五年当時の、水爆実験が行わ

れた国際社会状況の分析から始め、科学とニヒリズムの問題が深刻に顕在化した事情が西谷にいかに大きな影響を与えていたかを明かしていく。西谷の思想として、科学的真理性の場の底を破って無底の場において受け止めることで、科学的真理に「深み」が与えられること、その無底の場の自覚は藝術や宗教に現れている「直接知」によること、等があったと論じている。

北野裕通「片岡仁志」は、西田哲学に深い影響を受け、禅の実践者であった教育者・片岡の教育思想の根本に、カントをふまえた人格の思想があること、片岡自身の人格の練磨の背景には、三浦承天、山崎大耕の禅僧と京大の恩師・西田幾多郎、小西重直とがあったこと、人格形成の教育の実践としては、禅の作務修行を模した労作教育があったこと、等を紹介している。著者は、片岡がカントを批判的に超克しており、そこには身体性の強調があったことも指摘している。

山田邦男「無に生きる」は、まず片岡の禅の根底に「愛」があったこと、「愛即無、無即愛」が生涯揺らぐことのなかった立場であったこと、また西田哲学の徹底した実践者であったことを明かし、以下、その思想ないし立場を、①人格、②無、③愛、に分けて説明している。それぞれが人格を持つ自他は、絶対に独立的であると同時に結びつくものでなければならぬ。それを可能にするものが愛であるが、その愛は自他を超えた無において成立する。その無のもとに、他を自とする真の人格が成立する、という仕方で片岡の思想を整理している。

以上、ごく簡単な撮要で、各著者の真意を汲みきれていない

書評と紹介

かもしれないが、その場合は平にご容赦願うのみである。なお、第二部の個々の論文については、もはや紹介を省くが、「禅と哲学」という主題にとってその重要性はけっして第一部より低いということではない。ただ、その議論の内容は、各論文の題名からある程度推察されるであろうし、ひとえに紙数ももはや足りない故のみである。

ただもう少し、本書の重要な特徴にふれておきたい。それは、各論文で、禅と哲学の間の哲学的・論理的解明が追究されるだけにとどまらず、取り上げた思想家の「人」をめぐるエピソードが豊富に紹介されることである。特に、「外は広い、内は深い」、「久松真一における禅と茶と藝術と」、「省念老師のこと」、「無に生きる」等には、その趣があふれている。上田閑照は「まえがき」で、「今回の「禅と京都哲学」という標題は、「京都哲学」の範囲に入るなかで特に禅との親密なかかわりに生きる人たちだけを取上げ、その一人一人において「禅と哲学」がどのような事態になっているか、どのような事柄として自覚されていたか、そしてそのことがそれぞれ当人の生と思索の質とどのようにかわっているかを考察究明するという趣旨を表す」と述べている。「当人の生」にこそ、「禅と哲学」の具現を見るべきであり、その意味では「人」の描述なしには本書の趣旨をまっとうしかねたことであろう。

中でも、土井道子「省念老師のこと」は、森本省念老師の人を活写したのみのもので、哲学の究明がそこにあると見るかどうかは種類の見方もあるが、生きた禅がどのようなものであるかをこの上なく明瞭に提示している。さらに、山田邦男「森

本禅の立場」の結びは、以下のようなものである。「久松君が絶対主体道やったら、わしのは絶対メロメロ道や」と言って森本はニコツと微笑んだ。「我れに大力量あり、風吹かば即ち倒る」と。これはもちろん優劣ということではなく、「春色高下なし、花枝自ずから短長」と言うべきものであろう。」

さて、以上のような内容の本書に対して、若干の感想を述べてみたい。

ともかくここに、確かに禅を修めてしかも哲学に生きた個性ある六名の「人」と「思想」が詳しく論じられており、その展開の多彩さにおいて、その問題の重要性において、実に興味深いものである。京都に花開いた「禅と哲学」がこうしたかたちでまとめられたことは大変ありがたいし、意義深いことと思う。各論文の議論の質も、総じてきわめて高いものである。

ただし、役目柄あえて多少批評めいたことをいえば、まずここでは、禅とは何か、哲学とは何かについて、すでに自明のこととしたまま論じられている感がある。禅に関してはおよそ臨済の伝統にたつたる禅として、ある一定のものが前提されているという了解は可能であろう（ただし大橋は道元を論じているが）。しかし久松の禅は、西田の禅とどのくらい共通で、どのくらい異なっているか。森本の禅は、大拙の禅とどのくらい共通で、どのくらい異なっているか。体験はすべて同じで、自覚の地平から少しずつ異なるのか、自覚のあり方までは同じで思想表現において異なるのか、むしろ禅体験そのものが実は異なっているのか。一口に禅といっても、すでに京都において

けっこう異質のものがありえたことを押さえておく必要はないであろうか。

また、言葉で表現すればそれはすべて哲学なのか、何らか論理的な表現がある程度一貫して説かれる場合から哲学と認められることになるのか、さらには多少なりとも体系的な萌芽が見られる場合に至ってはじめて哲学と言えるのか、という問題はないわけではないであろう。逆に言えば、禅と京都哲学という命名からは、実際に何と何を対決・対比させようとしたのかが不明であり、実際に論じられていることも、各論文の対象となる人により多彩で、全体としてやや拡散している。もちろん、広い範囲の多くの問題をさまざまな地平で考察したという言い方もでき、そのことは大いに意味有ることではあるが、畢竟、禅と京都哲学ないし禅と哲学とは何なのか、という結論をまとめることを読者に任せているのは、京都哲学研究会という一つの研究組織があっただけに、やや残念に思われる。

すでに述べたように、「禅と哲学」という問題には、東洋と西洋、体験と言語、無分別と分別、宗教と科学、永遠と現代等々の根源的な種種の問題が埋蔵されているが、根本は、覚体験と言語表現の関係の問題であり、場所的論理と対象論理の関係の問題に集約されるであろう。前者においては、やはり大拙の、禅体験―禅意識―禅思想という分析が、一つの大きな手がかりになる。それは、上田閑照が「総説」で提示している、「純粋経験」―「純粋経験が唯一の実在である」―「純粋経験を唯一の実在としてすべてを説明してみたい」というA―B―C連関の構造とも重なりあっている。ただし、この範囲の限りに

おいては、後者の対象論理の位置づけの問題はまだ究明されてはいない。「禅思想」にしても、Cレベルの言説にしても、対象論理を脱して事実そのものを事実そのものに即してある程度体系的に語る地平であるからである。大拙は、無分別の分別のみでなく、超個の個とも、真空妙用とも言った。西田は、絶対矛盾的自己同一とも逆対応とも言った。そのような哲学に対して、さらに対象論理（科学や日常の認識の立場）がどのような位置づけになるのかまで、詳細に跡づけないと、上述の種種の問題を見究めるまでには至らないのではないか。

その意味では、この研究会が引き続き活動され、多少、課題を絞ってその課題を集中的に検討し、その成果をあらためて提示してほしいと念願する次第である。